

今昔物語

卷第
28
U

第40

594

今昔物語集卷第廿八

本朝付世俗

近衛舍人共稻荷詣重方值女語第一

賴光郎等共紫野見物語第二

圓融院御子日參會稱吉忠語第三

尾張守□□五節所語第四

越前守爲盛付六衛府官人語第五

歌讀元輔賀茂祭渡一條大路語第六

近江國矢馳郡司堂供養田樂語第七

本寺基壇依物啓付異名語第八

禪林寺上座助泥缺破子語第九

近衛舍人秦武員鳴物語第十

祇園別當威戒秀被行誦經語第十一

或殿上人家忍名僧通語第十二

銀鍛冶延正蒙花山院勘當語第十三

御導師仁淨云合半物被返語第十四

豐後講師謀從鎮西上語第十五

阿蘇史值盜人謀道語第十六

左大臣御讀經所僧醉茸死語第十七

金峯山別當食毒茸不醉語等十八

比叡山橫川僧醉茸誦經語第十九

池尾禪珍內供鼻語第二十

左京大夫□□付異名語第廿一

忠輔中納言付異名語第廿二

三條中納言食水飯語第廿三

穀斷聖人持米被咲語第廿四

彈正弼源顯定出閉被咲語第廿五

安房守文屋清忠落冠被咲語第廿六

伊豆守小野五友目代語第廿七

尼共入山食茸舞語第廿八

中納言紀長谷雄家顯狗語第廿九

左京屬紀用茂經鯛荒卷進大夫語第三十

大藏大夫藤原清廉怖猫語第卅一

山城介三善春家怖蛇語第卅二

大藏大夫紀助延郎等唇被咋龜語第卅三

筑前守藤原章家侍錯語第卅四

右近馬場殿上人種合語第卅五

比叡山無動寺義清阿闍梨嗚呼繪語第卅六

東人通花山院御門語第卅七

信濃守藤原陳忠落入御坂語第卅八

寸白任信濃守解失語第卅九

以外術被盜食瓜語第四十

近衛御門倒人蝦蟆語第四十一

傳大納言得烏帽子侍語第四十二

立兵者見我影成怖語第四十三

送江國篠原入墓穴男語第四十四

近衛舍人共稻荷詣重方值女語第一

今昔衣曝の始午の日は昔より京中に上中下の人稻荷詣とて参り集の日也其れに例よりは人多く詣ける年有けり其の日近衛官の舍人共参けり□の兼時下野の公助茨田の重方秦の武員茨田の爲國經部經の公友など云止事无き舍人共餌袋破子酒など持せ列て参けるよ中の御社近く成る程に参る人返る人様々行き違けるよ艶す装をきたる女會たり濃き打たる上着に紅梅萌黄など重ね着て生めわく歩ひたを此の舍人共の來れは女立去て木の本に立隠れて立たるを此の舍人共不安す可咲き事共を云懸て或は低して女の顔を見むと一過死持行くに重方は本より色々しき心有ける者なれば妻も常に云妬みけるを不然ぬ由を云ひ戯戯てを過ける者なれば重方中に勝れて立留りて此の女に目

を付て行く程に近く寄て細に語と女の答ふる様人持給へらむ人の行
摺の打付心に宜はむ事聞ゆむこそ可咲けれど云ふ音極て愛敬付たり
重方云く我君々々賤の者持て侍れどもしや顔は猿の様にて心は販
婦よて有れは去なんと思へとも忽に綻可縫さ人も无からむ悪けれ
は心付に見えむ人に見合はし具に引移なむと深く思ふ事にて此く聞
ゆる也と云は女此は實言を宜ふか戯言を宜ふかと問へは重方此の御
社の神も聞食せ年来思ふ事を此く參る驗と有て神の給たる思へは極
くなむ喜と然て御前を寡にて御するゆゑ何くに御する人をと問へ
は女此にも指せる男も不持^持して官仕をなむせしを人制せしは不
參なりし其の人田舎にて失にしかは此の三年は相ひ憑む人も
なと思て此の御社にも參たる也實に思給ふ事ならは有所をも知らせ

奉らむいてや行摺の人の宣はむ事を憑むこそ嗚呼なれ早う御しね丸
も罷なむと云て只行よ過れり重方手を摺て額よ宛てし女の胸をする
許し烏帽子を差宛て御神助け給へ此る侘しき事を聞ゆせ給をや
て此より參て宿には夕足不踏入しと云て低して念し入たる髻を烏帽
子超しに此の女ひたと取て重方頬を山も響く許し打つ其の時に重
方奇異く思えて此は何に給ふと云て仰き女の顔を見れば早う我
の妻の奴の謀たる也けり重方奇異く思て和御許は物に狂ふかと云
へは女已は何ゆて此く後目た无れ心は仕ふを此の主達の後目た无き
奴をと來つ告れば我れを云ひ腹立むと云なめりと思てこそ不信
さりつるを實を告るにこそ有けれ已云つる様に今日より我の許に
來らば此の御社の御箭目負なむ物を何ゆて此は云をしや頬打缺て行

來の人を見せて咲はせむと思ふを己よと云へも重方物にな不狂を尤理也と咲つゝ搦云へとも露不許す而る間異舎人共此の事を不知すして上の岸に登り立て何と田府生は送れたるそと云て見返たれば女と取組て立てり舎人共彼れは何に爲る事と云て走り返りて寄て見れば妻に打ち被□ら立けり其の時舎人共吉くし給へり然はこそ年來は申つれと讀め嗚る時女此く被云て此の主達の見るよ此く己の心は見顯はすと云て髻を免したれば重方烏帽子の萎たる引疏あとして上様へ參ぬ女は重方己は其の假借しつる女の許に行け我の許よ來ての必ずしや足打折てむ物を云て下様へ行にけり然く其の後然く云つれとも重方家に返來て搦ければ妻腹居にければ重方云く己の尙重方の妻なれば此く厭き態はしたる也と云ければ妻穴鎌ま此の

白物目盲の様に人の氣色をも否不見知す音をも否不聞知て嗚呼のよるまひして人に被咲るの極死白事には非すやと云てを妻にも被咲ける其の後此の事世に聞けて若き君達など吉く被咲ければ若き君達の見ゆる所に重方逃げ隠れなむける其の妻重方失ける後よ年も長に成て人の妻に成てそ有けるとなむ語り傳へたるそや

賴光郎等共紫野見物語第二

今昔攝津の守源の賴光の朝臣の郎等よ有ける平の貞道平の季武の公時と云ふ三人の兵有けり皆見目も綱々しく手聞き魂太く思量有て愚なる事无りけを然れに東にても度々吉き事共をして人よ被恐たる兵共也ければ攝津の守も此れ等を止事无き者にして後前に立てを仕ひける而る間賀茂の祭の返ぞの日此の三人の兵云合せて何

り今日物は可見きを謀けるに馬に乗を次きて紫野へ行むに極く見
苦ゆるへ一歩より顔を塞きて可行きに非ず物は極て見え欲し何
の可爲さぞ歎けるよ一人の云く去來某大徳の車を借て其に乗て見む
と又一人の云く不乗知ぬ車に乗て殿原に値ひ奉て引落れて被蹴や由
无き死にをやせむすらむと今一人の云く下簾を垂て女車の様にて見
む何れと今二人の者此の義吉のりなむと云て此く云ふ大徳の車既
に借持來ぬ下簾を垂て此の三人の兵賤の紺の水干袴などを着乍ら乗
て履物共は皆車に取入れて三人袖も不出さずして乗ぬれに心悟き女
車に成ぬ然て紫野のたへ遣せて行程に三人乍ら未だ車にも不乗さり
ける者共よて物の蓋に物を入れて振らむ様に三人被振合て或は立板に
額を打ち或は己等とち頭を打合せて仰様に倒れ低く様に低く轉て行

くに惣て可堪に非ず如此して行程に三人乍ら酔ぬれに踏板に物突散
して烏帽子をも落してけり牛の一物よて早く引つゝ行けに横なはり
たる音共にて痛くな不早めを々々そと云行けに同く遣次けて行く車
共も後ある歩ち雑色共も此を聞て恠ひて此女房車の何ある人の乗た
るにか有らむ東鴈の鳴合たる様に舌た^舌たるに心も不得ぬ事かな
東人の娘共の物見るにや有らむと思へとも音氣はひ大きにて男音也
惣て心不得すと思ける此て既に紫野よ行着て車搔下して立てに餘り
疾く行て立つれば事成るを待つ程に此の者共車に酔ひたる心地共な
れに極て心地悪く成て目轉て萬の物逆様よ見ゆ痛く酔にければ三人
乍ら尻を逆様に寝入にけり而る間も事成て物共渡るを死たる様に
寝入たる者共かれは露不知て止め事畢て車共懸け騒く時になむ目悟

めて驚たりける心地を悪し寝入て物は不見す成ぬれハ腹立しく妬た
く思ふ事無限きに久返さの車飛はし驟むに我等の生ては有なむや千
人の軍の中に馬を走らせて入らむ事は常に習たる事なれば不怖す只
貧窮氣なる牛飼童の奴獨し身を任せて此く被惱れては何の益の可有
きを此の車に多々返らば我等ハ命は有なむや然れば只暫し此有ら
む然て大路を澄して歩より可行き也と定めて人澄て後三人乍ら車よ
り下ぬれば車は返し遣つ其の後皆□と履て烏帽子を鼻の許に引入て
扇を以て顔を塞てを攝津の守の一條の家ハ返たりける季武ハ後に
語をハ也猛き兵と申せとも車の戦は不用に候なり其より後懲とも懲
て車乃當には不罷り寄すと然れば心猛く思量賢こき者共なれとも未
た車に一度も不乗さりける者共にて此く悲して醉死たりける嗚呼の

事也となむ語り傳へたることや

圓融院御子日參會禰吉忠語第三

今昔圓融院の天皇位まらせ給て後御子の日の逍遙の爲に船岳と云ふ
所ハ出させ給けるに堀川の院より出させ給て二條より西へ大宮まで
大宮より上ハ御ましけるハ物見車所無く立重たり上達部殿上人の仕
れる装束書むにも可書盡くも非す院ハ雲林院の南の大門の前ハして
御馬に奉る紫野ハ御まし着たれを船岳の北面に小松所々ハ羣生たる
中に遣水を遣り石を立砂を敷て唐錦の平張を立て簾を懸板敷を敷き
高欄をりして其の微妙き事無限ハ其れに御まして其の廻に同錦の幕
を引廻りたり御前近く上達部の座有り其の次に殿上人の座有り殿
上人の座の末の方に幕に副て横様に和歌讀の座を敷たり既に御まし

着ぬれは上達部殿上人仰に依て座に着ぬ和歌讀共は兼て召有ければ皆參て候ふ座に候へを仰せ被下ぬれ仰に依て次第に寄て座に着ぬ其の歌讀共は大中臣の能宣源の兼盛清原の元輔源の茲之紀の時文等也此の五人は兼て院より廻り文を以て可參さ由被催たりければ皆衣冠して參たる也既に座に着並ぬるに暫許有て此の歌讀の座の末に烏帽子きたる翁の丁子染の狩衣袴の賤氣なるを着たる由來て座に着ぬ人々有て此は何者ぞと思て目を付て見れ仰禰乃好忠也けり殿上人共彼れ仰丹り參たるかと忍て問へは曾丹此く被問て氣色立て然に候ふと答ふ其の時に行事の判官代は彼の曾丹仰參たるに召たる仰と殿上人共問ければ判官代然る事も無しと答ふれば然は異人の承りたるかと尋ね持行くに惣て承りたりと云ふ人無し然れに行事の

判官代曾丹^丹居たる後に寄て此は何よ召も無しに參て居たるを問へ仰丹仰云く歌讀共可參さ由被催ると承り然に何てり不參さるへき此の參たる主達に可劣き身かはと判官代此れを聞て此奴の早う召も無きに押て參たる也けりと心得て何に召も無しは參たるを速に罷り出よと追立ると尙ほ不立して居たり其の時法興院^建の大臣閑院の大將など此の事を聞給てしや衣の頸を取て引立よと行ひ給へは若く勇ある下藤殿上人共數曾丹仰後に寄て幕の下より手を指入て曾丹か狩衣の頸を取て仰様引倒して幕の外に引出したると一足つゝ殿上人共踏ければ七八度許被踏よけり其の時に曾丹仰起立て身の成様も不知逃て走ければ殿上人の若き隨身共小舎人童共曾丹仰走る後に立て追次死て手を叩て咲ふ放れ馬などの様に追ひ喰る事系愕

たのし然れば此を見るに多の人老たる若きとも無く咲ひ合たる事
無限し其の時に曾たむ行岳の有走り登立て見返て追次きて咲ふ者共
に向て音を高く擧て云く汝等何事を咲ふを我の耻も无き身を云は
む聞けよ太上天皇子日に出させ給ふ歌讀共の召と聞て好忠か參て座
に候ふ搔栗をほとく食ふ次は被追立次に被蹴る何の恥なると云ふを
聞て上中下の人々咲ふ音糸愕たよ其の後曾たむ逃て去にけり其比
は人皆此の事を語てなむ咲ひける然れば下姓の者は尙は弊さ也好
忠和歌は讀けれども心の不尙歌讀共召と聞て召も无きよ參て此る恥
を見し萬の人に被咲て末の代まで物語に成る也となむ語り傳へた
るとや

屋張守□□五節所語第四

今昔□□天皇の御代よ□□の□□と云ふ者有けり年來舊受領よて官
も不成て沈み居たりける程よ辛くして尾張の守に被成たりければ
喜ひ乍ら任國に念き下たりけるに國皆亡ひて田島作る事も露无かり
けれこの守み本より心直くして身の弁へなとも有けれ前々の國
をも吉く政けれこの國に始めて下て後國の事を吉く政けれ國
只國に福して隣の國の百姓雲の如くに集り來て岳山とも不云田島
に崩し作けれ二年の内に吉き國に成にけり然れば天皇も此れを聞
し食て尾張の國は前司に被亡されて无下に弊と聞食すに此の任二年
に成ぬるに吉く福したなれと被仰ければ上達部も世の人も尾張吉き
國に成たりと讃ける然て三年と云ふ年五節被宛にけり尾張は絹糸
綿など有る所なれば萬つ不之況や守本より物の上手にて物の色共打

目針目皆糸と目安く調へ立て奉ける。五節の所には常寧殿の戌亥の角をそしたりけるに簾の色几帳の帷打出たる女房の衣共微妙く縫重ねたり此こそ色弊ゆめれと見ゆる無し然れば極ゆりける物の上手にこそ有けるなりと皆人も讚ける傳童など他の五節よりも勝たれ殿上人藏人など常に此の五節所の邊に立寄り氣色はとける。此の五節所の内に守より始めて子共類親共皆屏風の後集ひ居たり而るに此の守不賤ぬ人の流にては有けれども何なる事にてか有けむ此の守の祖も此の守藏人にも不成す殿上も不被許さりけれ内邊の事を傳ても不聞す况や見る事は无かをけり然れの子共も露不知さりけり其れ殿共立様造様官々の御方の女官共の唐衣禪禪着て行き殿上人藏人の出掛をし織物の指貫を着様々に装をきて通るを此の五節所

の内集り居て只此等に目を付て追らひて簾の許に出重なりて見けるに殿上人近く寄れハ屏風の後に逃隠る、間前に逃る人を後に逃る人指貫を被踏て倒るゝに後の者も夕蹟て倒る或ハ冠を落し或は先つ我れ疾く隠れむと迷ひ入る人なハ然て曲り居たるへきに夕少の者も渡れば追らひて出て見る然れば簾の内の様惡き事无限し若き殿上人藏人など此れを見て咲ひ興しける而る間若き殿上人共宿直所□居て各云合たる様此の尾張の五節所は物の色を微妙く立たる物ハ童傳も今年の五節所は此れを勝れたる但し此の守の一家に内邊の事を未だ聞にも不聞す夕不見さりけれ露の事を戀かりて追らひて出て見る夕我等に恐れて近く寄れ隠れ騒くは嗚呼に極き物ハ去來此れ謀て彌よ恐れ迷ハさむ何ハ可爲きと一人の殿

上人の云く□□^十或る殿上人の云く恐^十様有り^十何に云ひむと爲る
そと問への彼の五節に行て得意立て可告き様へ此の五節所をは殿上
人達極く咲ふそ然^十知り給へ此の五節所咲はむとて殿上人達の謀る
様は有^十有る殿上人此の五節所を恐さむとて皆紐を解て襦袢表衣を脱
下て五節所の前に立並て歌を作て歌はむと爲る也其の作たる様は髪
たよらはあゆ^十かせばこそをかせはこそ愛敬付たれと此の髪たよらと
云は守の主の毛清く髪^十の落たるを此る髪たよらして五節所に若^十女
房の中に交り居給たるを歌はむする也あゆかせはこそ愛敬付たれと
云ひ守の後向て歩ひ給り□□^十や^十なるを歌はむする也此く告申を事
をは實とも信^十不給と^十其れの明日の未申の時許は殿上人藏人の有
る限り皆褊て襦袢表の衣を皆腰から^十み^十て長若きとも不云此れを歌ひ

て寄來る者ならば此に申す事を實也けりと信^十給へと告けむと思ふ
そと云へは異殿上人實に和君行て利口に云ひ聞せよと云ひ契て散す
此く云ふ殿上人寅の日の未^十朝彼の五節所に行て守の子なる若^十き者
は會て得意立此の謀つる事を細々と語り聞すれば極く恐^十たる氣色に
て聞き居たり云畢つれば益^十无^十君達もそ不意^十見る和ら密に返なむ
此く告聞たりと異君達もな努々不宣そと云て去ぬ此の子祖の許に
新源少將れ君こそ御して此る事をなむ告給つると云は祖の守の主此
れを聞ま^十然々てと云ま^十只振ひ^十振ひて頭をわな^十して夜
前君達の此の歌を歌ひしを何れを歌ふに^十と^十惟く思ひし^十然は翁を
歌ひけるにこそ有^十けれ何の罪の錯の有れ^十此く翁を^十歌に作ては可
歌きを尾張の國の代々の國司に被亡て失^十たるを天皇の奔かてに成

一本深作淳
或深或線

給ひたれば何かはせむと思て極き術を深に吉き國に照立て奉るの惡
き^ハ此の五節奉る事は已の好て望て奉る^ハは天皇の押宛て被責れ
の難堪けれども奉にこそ有れ^ハ夕養の无き事^ハ若く盛なる齡に養の落
失たらはこそ嗚呼にも可咲くも有らめ年の七十に成たれば養の落失
たらむは可咲き事^ハ然れどもやは養た^ハら^ハ可歌き夕已をこそ憶
くの打も殺し蹴も踏まめ何^ハ帝王の御ます王宮の内にて紐を解き
編て^ハ狂ひ可歌きを更によも然る事不有^ハ其れは其少將の君の和主
の出立もせず籠たれども恐さむ^ハて虚言を被云るなり^無近來の若き人
の思遣も無く此く虚言を爲る也然様には異人をこそ恐^ハ謀らめ已れ
の賤くとも唐の事も此の朝の事も皆吉く知る身を^ハ然も不不知給^ハ
若き君達の口に任せて恐^ハ給ふなめ^ハ異人は被謀るとも翁^ハ更によ

も不被謀^ハ若し恐すらむ様に實^ハ王宮の内にて然^ハ紐を解き腰^ハら
^無として狂ては已^ハ依て其の主達は重罪に當^ハむ者を穴糸惜と云て
糸筋の様なる脛きを股まで褰けて扇き散して嗔り居たり此こそ腹立
とも夜前東の面の道にて此君達の^{本マ}の^ハ氣色は然も^ハてむかしと
思ければ漸く未の時に成る程^ハ何^ハ有らむと胸つふれて思ひ合へり
けるに未下る程に南殿の方より歌ひ喰て來る音すそ^ハ來れたなりと
集て舌を丸りと顔を振りつゝ恐居たる^ハ南東より此五節所の方に押
疑て來たるを見れと一人として尋常なる者の无^ハ皆欄表の衣を尻許
まで脱下たり皆手つ^ハら^ハ寄來て寄懸りて内と臨く五節所の
前の疊首に或は香を脱て居或寄臥^ハ或も尻と懸け或は簾に寄懸りて
内を臨く或は庭に立たてり^ハ皆諸音に此の養た^ハらの歌を歌ふ此く

恐す事ラとを知らる若き殿上人四五人こそ簾の内は有と有る者の恐ち迷ふ氣色を可咲とも見れ案内も不知さりける長殿上人共は此の五節所に有と有る者共の恐てわななくを極て恠と思ひけり然て守は然こそ然る事不有と道理を立て、云居たりつれとも有と有る殿上人藏人の皆褊て此の歌を歌ひて寄來る時に此の少將君の幼く御すれやも人の爲に後安さ心御しければ實を告給ふにこそ有けれ此く告給ふ事无四らま一は我四事とも不知て毫居らま一哀也ける君の御心かな千年萬年平四に榮え給へとて手を摺て祈り居るに此の君達一人直き者も無く醉様垂て褊たる人共の簾の内を臨く時に守今を我は被引出て老腰被踏折ると思ひけれは迷て屏風の後に這入て壁代の迫にわななき居たり子共親しき族なとは皆重なりて逃隠て篩ひ居たり然

て殿上人皆殿上に返ぬ其の後に尙若君達や有と見せて一人も無く皆御しぬと云ければ其の時よを守わなく、這出て、篩音にこそ何をり翁をこそ咲ひ給はめ帝王の御爲は此く无禮を至せるは奇異き事也此の主達へ必ず事有なむ者を吉し見よ已等天地日月明ら四に照し給ふ神の御代より以來此る事无一國史を見るよ敢て不記さす極く成ぬる世の中四など仰き居たりけり隣なる五節所の人共の臨て可咲と思けるま、以後に關白殿の藏人所に參て語けるを聞繼て殿原官原に聞え畢て被咲ける事无限し其の比は人二三人も居たる所には此の事をなむ語て咲ひけるとなむ語り傳へたるとや

越前守爲盛付六衛府官人語第五

今昔藤原の爲盛の朝臣を云ふ人有けり越前の守にて有ける時よ諸衛

の大根米を不成りければ六衛府の官人下部に至るまで皆發て平張の具共を持って爲盛の朝臣の家に行て門の前に平張と打る其下に胡床を立て有る限り居並て家の人をも出し不入る貴居たりけり六月計の極く熱く日長なるに未だ朝より未の時許まで居たりけるに此官々の者共日に炮迷はされて爲む方无りけれ共物の不成さらむに返らむやはどうと思て念して居たりけるに家の門を細目に開て長なる侍頭を指出て云く守の殿の申せと候ふ也須く疾く對面給はらは欲けれ共事の愕く被責れば子共女などの恐ち哭侍れば否對面して事の有様も申し不待ぬに此く熱き程に无期に被炮給ひぬらむに定て御咽も乾ぬらむ夕物超しに對面して事の由をも申し侍らむと思給るを忍やかに御杯など參せむと思ふに何か便不无ましく先左右近に官人達

舍人など入給へ次々の府の官人達近衛官の人達の立給なむ後に可申し一度に可申けれとも怪の所も糸狭く侍れば多く可羣居給ふへき所も不待ぬは也暫く待給へ先つ近衛官の官人達入給なむやとなむ侍ると云へは日に被炮て實に咽も乾たるよ此く云出したれば事の有様をも云ひむと思て喜びを成して糸喜き仰也速に參り入て此く參たる事の有様をも申し侍らむと答ふれば侍其の由を聞て然はとて門を開たれば左右近の官人舍人皆入ぬ中門の北の廊に長筵と西東向様に三間許に敷せて中机二三十許と向座に立て其れ一居うる物を見れば鹽辛き干たる鯛と切て盛たり鹽引の鮭の鹽辛氣なる夕切て盛たり驂の鹽辛鯛の醬などの諸に鹽辛き物共を盛たり菓子には吉く膿たる李の紫色なるを大きな春日器に十許つゝ盛たり居畢て後に然は先つ近

衛官の官人の限此方に入給へと云へは尾張の兼時下野の敦行と云ふ
舍人より始めて止事无き年老たる官人共打羣て入來ぬれは他の府の
官人も入ると云て門を開て鑰を差して鎰を取て入ぬ官人共の中門
は並居たれば疾く登り給へと云へは皆登て左右近の官人東西に向座
に着ぬ其の後先御杯疾く參れよと云へとも遅く持來る程に官人共物
欲しうりけるまゝに先つ忿て箸を取つゝ此の鮭鯛の鹽辛醬などの鹽
辛き物共をつゝゝるゝ御杯遅々と云へとも疾くも不持來す守對面
て聞ゆへけれ共只今亂れ風難堪くて速ゆにも吾不罷出す其の程御杯
食て後一可罷出いと云はせて不出來す然て御杯參らす大なる杯の窪
やかなるを二つ各折敷に居て若し侍二人捧て持來て兼時敦行に向座
に居たる前無置つ次に大なる提偏無の酒を多く入て持來たり兼時敦行

各杯を取て泛許受て呑に酒少し濁てすき様おれとも日に被焔て喉
乾しければ只呑に呑て持乍ら三度呑つ次々の舍人共も皆欲ゆりけ
るまゝに二三杯四五杯つゝ喉無一本て喉の乾けるまゝに呑てけり李を肴に
して呑よ夕御杯を頻に參せけれは皆四五度五六度つゝ呑て後に守簾
超し居さり出て云く心くら者を惜むて其達に此く被責申して耻を見
どの何て可思き彼の國に去年早魘して露徴得る物無し適ま露許得
たを物先つ止事无き公事に被責しやは有限り成し畢て努々殘物
无ければ家の庖折も絶て侍女童部なども餓居て侍る間に此る耻を
見侍れは可然き事と思てなむ先つ其達の御折に墓无き當飯をたに否
不參せぬにて押し量り給へ前生の宿報弊くて年來官を不給らて適ま
己の國は罷成て此く難堪く目を見侍るも人を可恨申さ事にも非ず此

れ目の耻を可見き報也と云て哭く事極し音も不惜ます泣居たきは兼
 時敦行り云く被仰る事極たる道理に候ふ皆押量り思給ふる事也然れ
 とも己等一人の事にも非ず近來府に露物不候て陣の格勤の者共侘申
 すに依て此く發り候へは此れ皆牙互て候へは糸惜く思ひ奉り乍ら此
 く參て候ふも極て不便に思ふなと云ふ程は此の兼時敦行近く居たれ
 の腹の鳴る事糸類也さふめき喰るを暫しは笏を以て机を扣て交えず
 或の奉を以スル口口は彫入れたとす守簾超に見遣れば末の座に至るま
 で皆腹鳴合てすひき口合へり暫許有れば兼時白地に罷立つと云て忿
 て走る様にて行ぬ其れを見て兼時の立つは付て異舍人共追らりひ
 て座を立て走り重なりて板敷を下るに或は長押と下る程はひちめ
 として垂懸けつ或は車宿に行て着物をも不解致す痢懸る者も有り或

奉忍事

は久疾く脱て褰て椽の水を出す如くは痢る者も有り或は隠れも不
 求敢す痢り迷たり如此くすれとも互に咲合て然は思つる事を如し
 此の翁共墓々しき事不爲せし必ず惟の事出してむとの押量つる事也
 何様にて守の殿は慄くも不御す我等か酒を欲かりて飲の至す所也
 と云て皆咲ひて腹を病て痢合たり而る間門を開て然と出給へ久次々
 の府の官人達入れ申さむと云へる吉き事なより疾く入れて久己等如
 様は痢よやと云て袴共に皆痢懸巾ひ纏て追らりひて出るを見て
 今四の府の官人共は咲て逃て去にけり早う此の爲盛の朝臣の謀け
 る様は此く熱き日平張の下は三時四時炮せて後に呼入れて喉乾たる
 時に李鹽辛は魚共を肴にて空腹吉に杏くつゝしり入させて酸き酒の濁
 たる牽牛子を濃く摺入れて吞せては其の奴原は不痢ては有なむやと

思て謀ありける也けり此の爲盛の朝臣は極たる細工の風流有物の物云ひにて人咲はする馴者ある翁よて有ければ此もいたる也けり由无き者の許に行て舍人共辛き目を見たりとてなむ其の時の人咲ひける其より後懲にけるよや有らむ物不成さぬ國の司の許に六衛府の人發て行く事をは不爲ぬ事よなむ有ける極たる風流の物の上手にて追返さむにも不返さしければ此る可咲き事を構たりける也となむ語り傳へたるとや

歌讀元輔賀茂祭渡一條大路語第六

今昔清原の元輔と云ふ歌讀有けを其れの内藏比助に成て賀茂の祭の使しけるに一條の大路渡る程に口の若き殿上人は車數並立て物見ける前を渡る間に元輔に乗たる庄馬大躰して元輔頭を逆様にして落ぬ

年老たる者の馬より落たれば物見る君達糸惜と見る程に元輔糸疾く起ぬ冠は落れければ髻露無し瓮を被たる様也馬副手迷をして冠を取て取れるに元輔冠を不爲にして後へ手搔いてや穴驢の暫し待て君達も聞ゆへは事有と云て殿上人の車の許も歩み寄る夕日の差たるに頭の綱々と有り極く見苦しき事無限と大路の者市を成して見喰り走り騒く車狭敷の者共皆延上りて咲ひ喰る而る間元輔君達の車の許に歩ひ寄る云く君達の元輔か此の馬より落て冠落したるをハ嗚呼也とや思給ふ其れハ然ハ不可思給す其の故は心はせ有る人そら物に躰て倒事常の事也何況や馬ハ心ハせ可有き物よも非す其れに此の大路ハ極て石高と夕馬の口を張たれハ歩はむと思ふ方にも不歩せすして此引き彼引き轉かす然れば我にも非て倒れむ馬と惡と可思きよ非す

其れに石に躓て倒れむ馬をは何々は可爲に唐鞍は糸盤也物可拘くも非す其れは馬は痛く躓けり落ぬ其れは不弊す冠の落るは物に多給ふる物に非す髪を以て吉く搔入たるに被捕る也其れに鬢の失にたれは露無し然れは落む冠を可恨き様無し其の例无きは非す□□の大 臣大嘗會の御禊の日に落し給を^タ□□の中納言の其の年の野の行幸に落し給ふ□□の中將は祭の返さの日紫野にて落し給ふ如此くの例計へ不可盡す然れは案内も不知給ぬ近來の若君達此れを可咲給き非す咲給はむ君達返て嗚呼なるへし此く云つゝ車毎に向て手を折つ計へて云聞ゆす如此く云畢て遠く立去て大路に突立て糸高く冠持詣來と云てなむ冠は取て指入れける其の時に此を見る人諸心に咲ひ惶けり冠取て取すこて寄たる馬副の云く馬より落させ給つる即て御

冠を不奉して无期に由無し事をは被仰つるを問ければ元輔白事をせそ尊此く道理を云聞せたらはお後々に此の君達は不咲さらめ不然すは口賢き君達は永く咲はむ者と云てを渡にける此の元輔の馴者の物可咲く云て人咲はするを役と爲る翁にてなむ有ければ此も面無く云也けりとなむ語り傳へたるをや

近江國矢馳郡司堂供養田樂語第七

今昔比叡の山の西塔に住ける教圓座主と云ふ學生有けり物可咲く云て人咲はする説經教化をなむしける其れは未だ若くして供奉と云て西塔に有ける時に近江國□□の郡に矢馳と云ふ所に有ける郡司の男年來極く此の人に志有て山の不合の事共など常に訪けれは教圓若は程にて貧き身なれば喜く思て過ける程に彼の郡司の男態と來たり何

事よ來つるそと問郡司の男の云く年來の願に依て佛堂をなむ造り奉りて候ふと此れ勲に吉く供養し奉らむとなむ思ひ給うる年來の睦に御まゝなむや何よ久勲よ可仕からむ事共をも被仰れむに隨て構可候き也年罷老て候へは偏に後世の爲よと思てなむ候ふと云へハ教圓詣て心事は糸安き事也其の日の未だ朝めて三津の邊に迎への船を遣せ給へた矢馳の津よ馬二三疋に鞍置て遣せ可給き也然らば功德勲に爲るにハ舞樂を以てこそは供養すれ此は皆極樂天上の様也但し其れは樂人など呼ひ下すは大事なれば否呼ひ不給と云へハ郡司ハ云く樂人は己ハ住候ふ津に皆候へハ樂仕らむ事は事にも不候す安き事に候ふ然れば樂を可仕きにこそ候ふなれと云へハ教圓供奉の云く然らば有らは極たる功德に成なむ疾々く返て其の日の曉に三津の邊に行

て船を可待き也と云へハ郡司喜て承はりぬ御船を疾く參せむと云て去ぬ其の日に成て曉に未だ暗きに西塔より念き下て三津の邊に白々と明る程に行たれば船は兼てより儲たりければ乘て行けるよ矢馳に渡る程一時許の渡りなれば巳時許に津に渡り着たりける見れば前よハ鞍置たる馬三疋と云ひハかど十余疋許引立たりた白装束したる男共十余人許立並たり凡そ様々の下人共四五十人許村々に立てり供奉此れハ物見る者共にや有らむ何を見そと思て東西を見廻せは露可見き物も只今不見はす船寄せつれば下て引き寄せたる馬に乗ぬ共なる法師二人夕馬に乗せて前に打立たるに今十余疋許の馬に此の白装束したる男共はらくと乗ぬ此の男共ハ迎へに遣せたる也けり也其の時になむ心得ける日の高く成ぬれハ馬を早めて念き行くに此の

白装束の男共の馬に乗たる或はひた黒なる田樂を腹に結付て袂より
脰を取出して左右の手に桴を持ちたり或は笛を吹き高拍子を突□を突
き杵を差て様々の田樂を二ツ物三ツ物も儲て打唄り吹きつれつゝ狂
ふ事無限に供奉此れを見て此は何かに爲る事も有らむと思へども
□て否不問す而る間此の田樂の奴原或は馬乃前に打立ち或は馬の後
に有り或は喬手に立て打行く然れは供奉今日此の郷の御靈會にや有
らむと思へは極わりける折にしも來り會て此は奴原の中に具して行
くの物狂りの態を不意に知たる人や會はむと思へは袖を以て顔
をつふと隠して行くに郡司の家漸く近く見ゆ家の門の前に百千の人
立擧て見る疾く忿て行らむと爲るは此の田樂の奴原供奉に向合て鼓
を打て向ひ□を笠の鉉に突懸け杵を捧て頭の上に招き此一つゝ行も

不遣せず腹立しき事無限に辛くして郡司の門の許に行着て馬より下
むと爲る程に郡司祖子出來て左右の馬の口を取て乗せ乍ら家の内に
傳さ入るれの供奉此を爲そ只其よて下せと云へとも穴忝なやと云て
耳にも不聞入す然て此の田樂の奴原の馬の左右は烈しつゝ次きて遊
ひて入る郡司吉く仕れ已等と云へは鼓打つ者三人馬の前に向て乙乙
仲張りて極打行けは供奉侘て疾く下しては吉くるへきは此く狂ひ行
けは馬をも不歩せずしてのどくゝと馬を歩する程に家乃内市を成し
て唄る辛くして廊の有る妻に馬を押寄せたれは喜ひ乍ら下ぬ□たる所
に居あつ先つ心も不得ぬ事なれは供奉郡司に彼の郡司は主聞給へ此
田樂の何の粉にて爲せ給ふと問へは郡司は云く西塔に参たりし
は勤に爲る功德には樂となむ爲るそと被仰しは儲て候ふ也其れに

講師との樂をしてなむ迎へ可奉と人の申せは參らせて候ひつる也と供奉其の折にそ此奴は田樂を以て樂とは知たりける也けりと心得て可咲く思へとも可云き人も无りりけれ此を供養し畢て山に登て勇たる小僧共の中は田樂の事を語れいとよみて咲ける事无限し供奉本より物云の上手なりければ何かは可咲く語りけむ賤の田舎人なれとも皆然様の事は知たる者を彼の郡司は無下也ける奴などそ此れを聞く人皆誇り咲けるとなむ語り傳へたるそや

木寺基増依物語付異名語第八

今昔一條の攝政殿の住給ける桃園の今の世尊寺也其にて攝政季の御讀經被行ける時に山三井寺奈良の止事无_レ學生共を撰て被請たりければ皆參たりけるに夕座を待つ程に僧共居並て或は經を讀み或は物

語などしてなむ居たりける寢殿の南面てと御讀經所に□たりければ其の御讀經所に居並て有る程に南面の山池などの極く謔きを見て山階寺の僧中算の云く哀れ此の殿の木立を異所に不似すといと云けるを傍に木寺の基増と云ふ僧居て此を聞くまゝに奈良の法師こそ尙疎き者は有れ物云と賤き者_ハ木立をこそ云へ木立と云ふらむよな後目た无きの言やと云て爪_ヲをはたゝとす中算此く被云て惡く申してけり然らば御前をこそ小寺の小僧とこそ可申かりければと云ければ有る僧共皆此れを聞て音を放て愕たゝゝく咲ひけり其の時に攝政殿此の咲ふ音を聞給て何事を咲ふと問はせ給ひければ僧共有のまゝに申しければ殿此れは中算の此く云はむとて基増の前よて云ひ出たる事を何ての心を不得すして基増の案に落て此く被云たることを弊

けれど仰せ給ければ僧共彌よ咲て其より後小寺の小僧と云ふ異名は付たる也けり无端く物咎めして異名付たるとてなむ基増悔しりける此の基増は□□の僧也木寺に住けるに依て木寺の基増とは云ふ也中算は止事无き學生也けるに又此く物云ひなむ可咲りけるとなむ語り傳へたるとや

禪林寺上座助泥缺破子語第九

今昔禪林寺の僧正と申す人御けり名をは深禪とを申ける此れを九條殿の御子也極て止事无りける行人也其弟子に徳大寺の賢尋僧都と云ふ人有けり其の人未た若くして東寺の入寺に成て拜堂しけるに大破子の多く入ければ師の僧正破子卅荷許調て遣らむと思給けるに禪林寺の上座よて助泥と云ふ僧有けり僧正其の助泥を召して然々の新

に破子卅荷をむ可入きを人々よ云て催と宣ひければ助泥十五人を書立て各一荷を宛て令催む僧正今十五荷の破子は誰に宛てむと爲るると宜ひければ助泥の申さく助泥り候こそは破子候よ皆も可仕けれとも催せと候へは半をい催して今半をば助泥の仕らむする也と僧正此を聞て糸喜き事也然らば疾く調へて奉れと宣ひつ助泥然らば然許の事不爲ぬ貧究やは有る穴糸惜と云て立て去ぬ其の日に成て人々に催たる十五荷の破子皆持來ぬ助泥の破子未た不見ゆ僧正怪しく助泥か破子の遅いなと思給ける程に助泥袴の袂を上て扇を開き仕ひてしたり顔にて出來たり僧正此を見給て破子の主此に來にたり極くしたり顔にても來るかなと宣ひけるに助泥御所よ參て頸を持立て候ふ僧正何そと問ひ給へは助泥其の事に候ふ破子五ッ否借り不得候ぬ也と

したり顔に申す僧正然てと宣へは音を少し短く成して今五は入物の不候ぬ也と申す僧正然て今五ツはと問給へは助泥音を極く竊にわなをかして其れは播斷る忘れ候にけりと申せは僧正物に狂ふ奴かな催さましかは四五十荷も出来なまゝ此奴は何に思て此る事をは關つるそと問はむとて召せと惶しり給けれとも跡を暗くして逃て去にけり此の助泥は物可咲しう云ふ者にてなむ有ける此に依て助泥の破子と云ふ事は云ふ也けり此れ嗚呼の事也となむ語り傳へたるとや

近衛舍人秦武員嗚物語第十

今昔左近の將曹にて秦の武員と云ふ近衛舍人有けり禪林寺の僧正の御檀所よ參たをければ僧正盡よ召入て物語などし給けるよ武員僧正の御前に蹲て久候ける間に錯て糸高く鳴してけり僧正も此を聞給

ひ御前よ數多候ひける僧共も此れを皆聞けれとも物□き事なれと僧正も物も不云ぬ僧共も各顔を守暫く有ける程に武員左右の手を披て面を覆て哀れ死はやと云ければ其の言に付てなむ御前に居たりける僧共皆咲ひ合たをける其の咲ふ交れに武員は立走て逃て去にけり其の後武員久く不參さりけり然如有らむ事共尙聞かむまゝに可咲き也程經ぬれば中々□□き事にて有る也武員なればこそ物可咲く云ふ近衛舍人にて然も死なはやとも云へ不然さらむ人は極て苦くて此も彼も否不云て居たらむは極く糸惜からむかしとなむ人云けるとなむ語り傳へたるとや

祇園別當戒秀被行誦經語第十一

今昔或る長受領の家に祇園の別當に戒秀と云ける定額忍て通ひけり

守此の事を髣知たをけれとも不知顔にて過しける程に守出たりける
間、戒秀入り替り入り居ていたり顔に翔ける程に守返り來たりけ
るに怪く主も女房共もすゝろひたる氣色見ければ守思ふに然こそ
い有らめと思て奥の方に入て見れば唐櫃の有るに不例す鑠差した
り定めて此れに入れて鑠を差たるなめりと心得て長しき侍一人を呼
て夫二人を召させて此の唐櫃只今祇園に持參て誦經よして來れを云
て立文を持せて唐櫃を搔出して侍に取せつれば侍夫に差荷はせて出
て行ぬ然れば主女も女房共も奇異氣色は有れとも□て物も不云す而
る間侍此の唐櫃を祇園に持參ければ僧共出來て此は止事无き財なめ
りと思て別當に疾く申せ兼ては否不開と云ひつゝ別當は案内を云
はせに遣て待つに良久く否尋ね會ひ不奉すこて使返り來ぬる而る間

誦經の使の侍は長々と否待候し已の見候へは不審りるまじ且つ只開
給へ念ひしく侍そと云へは僧共何り可有きよと云ひ繚ふと唐櫃の中
に細く侘し氣なる音を以て只ひ所司開キニセヨトクをカに開けと云ふ音有り僧共誦
經の使の侍も此を聞て奇異く思ひ合へる事无限し然れとも然て可有
き事に非ねは恐々つ唐櫃を開けつ見れば別當唐櫃より頭を指出たり
僧共此れを見て目口□□て皆立去よけり誦經の使も逃て返にけり而
る間別當は唐櫃より出て走り隠にけり此を思ふに守戒秀を引出し
て踏蹴んも聞耳見苦かりなむ只耻を見せむと思ひける糸賢き事也
し戒秀本より極たる物云にて有ければ唐櫃中にて此も云ふ也けを世
に此の事聞て可咲しくしたりとを讀けるをなむ語り傳へたると
や

或殿上人家忍名僧通語第十二

今昔誰とは聞慥けれい不書す或殿上人の家止事無く名僧忍て通ひけるを男然も不知て過ける程は三月の廿日餘その程に其の人内へ参にけり其の間に名僧其の家に入り居て装束を脱ていたを顔は翔けるに女房其の脱たる装束を取て男の装束共懸たる棹に交て懸てけり而る間内より男人を遣て内より人々と共に出て遊に行く事なむ有るに烏帽子と狩衣と取て遣せよと云に遣せたりけれい女房棹は懸たる□よ如なる狩衣を取て烏帽子に具して袋に入れて遣てけを然既に其の遊ふ所に君達と共に行にけるに其の所は使持行たれば開て此れを見るに烏帽子は有り狩衣は無くて推鈍の衣を疊て遣せたり此は何如と奇異しく思て思ふは然よこそは有らめと心得つ殿上人共居並て遊ひ

ける所也けれい異君達も此れを見けり恥く奇異しく思ひけれとも甲斐无くて衣を疊み乍ら袋に入れて返し遣るとて此なむ書て遣ける

こはいりにけふはうつきのひとひは

またきもいつるころもゆへかな

と書て遣てやめて其のまゝに家にも不行して絶にけり早う女房の愚にて狩衣を取て袋に入ると思ひけるに暗き程にて懸交せたりければ騒きて取ける程に同様に□よ如なる僧の衣を取り違へて入れてける也けり妻男の文を見て何に奇異かりけむ然れとも甲斐无くて止にけり隠すすれとも此の事世に聞ゆて男をを心いせ有り極かりける人りなと讀けるとなむ語り傳へたるとや

銀鍛治延正蒙花山院勘當語第十三

今昔銀の鍛冶は□□の延正と云ふ者有けり延利の父惟明の祖父也其の延正を召して廳に被下にけり尙妬く思食ければ吉く誠よと仰せ給て廳に大きなる壺の有けるに水を一物い入れて其れに延正を入れて頸許を指出して被置たりけり十一月の事なれハ篩ひ迷ふ事无限一漸く夜深更る程に延正の音の有る限り擧て叫ぶ廳は院の御ます御所に系近かりけれハ此奴の叫ぶ音現はに聞けり延正叫々て云なる様世の人努々穴賢大波波法皇の御邊に不参入な糸恐悲く難堪き事也けり只下衆にて可有き也けり此事聞持て本をるす叫ひけるを院聞一食て此奴痛う申したる物云ひよこそ有けれと被仰て忽召出して祿を給て被免にけり然は延正本より物云ひ也ければ物云ひの徳見たる者如なとそ人云ける鍛冶の徳にうき目を見て物云ひの徳にて被免る奴如など

そ上下の人云けるとなむ語り傳へたるとや

御導師仁淨云合半物被返語第十四

今昔朱雀院の天皇の御代に仁淨と云ふ御導師有けり極たる教化の上手よてなむ有ける爰物云ひにて萬の殿上人君達などに云合て遊敵にてなむ有ける其れハ御佛名に登けるに藤壺の口に八重と云半物立てり檜扇を指て隠したりけるを見て仁淨カ廁に檜垣差て賤の物も不超すやと云て過けると半物程も無く尾刺差たる狗不入とてと云ければ仁淨上に登て殿上人共に會て系辛く此なむ□□八重に被云たると語りければ殿上人共此を聞て極く八重を讚けり仁淨も愛し感しけり其より後八重の思え増て宮々にも極くなむ讚めさせ給ひけり仁淨は本より然る物云ひにて有けるを八重の然ハ云ひ返したりける心慥トく微

妙けれ昔は女なれども此く物云ひ可咲れ者共なむ有けれの世の人も
與有てを思けるとなむ語り傳へたるとや

豊後講師謀從鎮西上洛語第十五

今昔豊後の講師□□を云ふ僧有けり講師に成て國に下て有けるに任
畢まければ久任をも延へむと思可然き財共船に取積て京へ上げるま
相知れる者共の云ける様近來海には海賊多りあり其に可然兵士も不
具て物をは多船取り積て上り給ふは糸心幼れ事也尙可然らむ者
共を語ひて具して將御せと講師の云ひ事爲るに錯て海賊の物を我
れは取とも我の物とは海賊取てむやせて船は胡録三腰許取り入て墓
々しと兵立たる者一人も不具て上けり國々を通り持行くに□□程に
て怪き船二三艘許後前まゝ出來ぬ前を横様ま渡り久後に有て講師の

船を衛つ此の船の内なる者共海賊來にたりとて恐ち迷ふ事糸極し然
れども講師露不動す然る間海賊の船一艘押寄す漸く近く寄する程に
講師青色の織物の直垂を着て柑子色ある紬の帽子をして□□の方に少
し居さり出簾と少し卷上て海賊に向て云く何人の此は寄り坐るそと
海賊の云く侘人の糧少し申さむや爲に參たる也と講師の云く此の船
には糧も少し有り輕物も人要す許の物の少々有り何にまれ其達の御
心に任す侘人など名乗れの糸惜さに少しをゆ進ま欲しけれども筑紫
の人の聞て云ひな様の伊佐の入道は其々にて海賊に値て被縛て船の
物皆被取にけりところの云ひむすらめと然れの心との否不進ましき
也能觀既に年八十も成あむとす此まで生たる事不思懸ぬ事也東の度
々の戦に生遁て八十に及て其達に可被殺き報こそ有らめ此れ兼て

思つる事也今始めて可驚き事に非ず然れば其達疾く此の船に乗を移
て此の老法師乃頸を掻切れ此の船に侍る男共穴賢彼の主達に手向な
不爲を今出家して後にも今更に戦を可爲し非ず此の船を疾く漕よせ
て彼の主達を乗せ進れど海賊此れを聞て伊佐の平新發意の座するに
こそ有れ疾く逃げよ已等と云て船を漕次て逃にけり海賊の船は疾く
構たる船なれど鳥の飛如くして去ぬ其の時に講師従者共に此を見
よ已等現に我れや海賊に物被取たると云て平に物共京に持上て然
其國の講師に更に成て下ける度より可然人の下けるに付て筑紫に下
て道の事共を人に語ければ極き盗人の老法師也とを聞く人讚めけ
る伊佐の新發意と名乗らむと思ひ寄ける心は現に伊佐の新發意にも
増りたりける奴也か」と云てそ人咲ひはる此の講師と物云ひ可咲き

奴にてそ有けれは然も云ける也となむ語り傳へたるとや

阿蘇史値盗人謀道語第十六

今昔阿蘇の□□と云ふ史有けり長け短也けれども魂は極に盗人にて
そ有ける家の西の京に有けれは公事有て内に參て夜深更て家に返け
るに東の中の御門より出て車に乗て大宮の下に遣せて行けるに着た
る装束を皆解て片端より皆帖て車の疊の下に直く置て其の上に疊を
敷て史は冠と襪を履て裸に成て車の内に居たり然て二條より西様
に遣せて行くに美福門の程を過る間に盗人傍よりいらくと出來ぬ
車の轆に付て牛飼童を打るは童は牛を弃て逃ぬ車の後に雜色二三人
有けるも皆逃て去にけり盗人寄來て車の簾を引開て見るに裸にて
史居たれど盗人奇異と思て此は何ゆにと問へは史東の大宮にて如

此也つる君達寄來て己か裝束をい皆召れつと笏を取て吉き人に物申す様に畏まりて答ければ盜人咲て奔て去りけり其の後史者舉て牛飼童をも呼ければ皆出來にけり其よりなむ家に返にける然て妻に此の由を語ければ妻の云く其の盜人にも増たりける心にて御けると云てを咲ける實に糸怖き心也裝束を皆解て隠し置て然云いむと思ける心いせ更に人の可思寄き事非す此の史は極たる物云にてなむ有ければ此も云ふ也けりとなむ語り傳へたるとや

左大臣御讀經所僧醉茸死語第十七

今昔御堂の左大臣と申して批把殿に住せ給ひける時に御讀經勤ける僧有けり名をい□□となむ云ける□□の僧也批把殿の南に有ける小屋を房として居たりける秋比童子の童に有て小一條の社に有ける

藤の木に平茸多く生たりけるを師の取り持來て此る物なむ見付たると云ければ師系吉き物持來たりと喜て忽に汁物に爲させて弟子の僧童子と三人指合て吉く食てけを其の後暫あつて三人乍ら俄に頸を立て病迷ふ物を突き難堪く迷ひ轉て師と童子の童とは死ぬ弟子の僧い死許病て落居て不死す成ぬ即ち其の由を左大臣殿聞せ給て哀りり歎かせ給ふ事无限し貧りつる僧なれば何ゆすらむと押量らせ給て葬の粉に絹布米など多く給ひたりければ外に有る弟子童子など多く來り集て車に乗せて葬てけり而る間東大寺に有る□□と云ふ僧同く御讀經に候ひける其れも殿の邊近き所に量僧と同し房宿したりけるに其の同宿の僧の見ければ□弟子の下法師を呼て私語て物へ遣つ要事有て物へ遣にこそは有らめと見る程即ち下法師返り

來ぬめり袖に物を入れて袖を覆て隠して持來たり置くを見れば平茸と一袖に入れて持來たる也けり此の僧此の何その平茸に何有らむ近來此く奇異き事有る比何なる平茸に有らむと怖しく見居たるに暫許有て燒漬にして持來ぬ□□飯も不台せて只此の平茸の限を皆食つ同宿の僧此れを見て此は何その平茸を俄に食せと問へは□□か云く此れは□□の食て死たる平茸を取に遣はして食也と同宿の僧此は何に給ふ事を物に狂ひ給ふかと云へは□□欲く侍ればと答へて何に共不思想らて食を同宿の僧制し可敢くも非ぬ程なれば此く見置まゝと忿て殿に參て夕極き事出詣來候ひなむとす然々の事なむ候ふと申さずれば殿此れを聞せ給て奇異き事なむと仰せ給ふ程に□□御讀經の時繼とて參ぬ殿何に思て此る平茸とは食けるぞと問

はせ給へは□□の申く□□の葬料を給ひて恥を不見給へす成ぬるかうらやましく候也□□も死候ひなむに大路にこそは被棄候はめ然れは□□も茸を食て死に候なは□□の様は葬粉給はり候ぬへかめりと思給へて食ひ候ひつる也其れに不死ぬ成り候ひぬればと申しければ殿物に狂ふ僧かなと仰せ給ひてなむ咲はせ給ひける然れば早う極き毒茸を食へとも不酔ぬ事にて有けるをは人と愕かさむとて此く云居る也けり其の比は此の事をなむ世に語て咲ひける然れば茸を食て酔て忽に死ぬる人も有り夕此く不死ぬ人も有れは定めて食ふ様の有るにこそ有らめとなむ語を傳へたるとや

金峰山別當食毒茸不酔語第十八

今昔金峰山に別當にて有ける老僧有けり古は金峯山の別當は彼の山

の一蕨をなむ用ける近う成て然は無き也けり其れは年來一蕨なる
老僧別當にて有けるに次の蕨なる僧有て此の別當早う死ねり我れ
別當は成らむと勲に思けれども強よ強よとして死よ氣も無りけ
れは此の二蕨の僧思ひ侘て思ひ得る様此の別當四年は八十に餘たれ
とも身すこやの七十本々に無く強々として有に我れも既に七十に成
ぬ若し我れ別當にも不成て前に死ぬる事も有る然れば此の別當
を打殺させむも聞え現のなりぬへけれの只毒を食せて殺してむと思
ふ心付ぬ三寶の思食さむ事も怖しけれとも然りとして何のせむと
思て其乃毒を思ひ廻すに人の必ず死ぬる事ハ昔の中に和太利と云ふ
昔こそ人其れを食ひつれの酔て必ず死ぬる此れを取て艶す調美し
て平昔と云て共の別當に食せては必ず死なむとす然て我れ別當

に成てむと謀て秋比也けれと自ら人も不具すして山は行て多く和太
利を取り持來しけり生夕暮方ハ房は返て人にも不見せすして皆鍋に
切入つ煎物に艶す調美してけり然て夜明て未だ朝ハ別當の許に人を
遣て急と御座せと云はせたれの別當程も無く杖を突て出來たり房主
指向ひ居て云く昨日人の微妙き平昔を給ひたりしを煎物にして食
せむとて申し候ひつる也年老てハ此様の美物の欲く侍る也なと語ら
へは別當喜て打うなつきて居たるに編をして此の和太利の煎物を温
めて汁物にて食せたれの別當糸吉く食つ房主ハ例の平昔を別に構へ
てそ食ける既に食畢て湯など飲つれば房主今も得つを思て今や
物突迷ひ頭を痛かり狂ふと心も無く見居たるに忽て其の氣色も
无けれの極く悴しと思ふ程ハ別當齒も无き口を少し頬咲て云く年來

此の老法師と未だ此く微妙く被調美たる和太利をこそ不食候ナリヌさりそ
れいと打云て居たれば房主然と知たりける也けりと思ふに奇異と云
ふも愚也ハハや耻くて更に物も否不云にして房主入ぬれば別當も房へ返
りにけり早う此の別當は年來和太利を役と食けれども不酔さりけ
る僧にて有けるを不知て搦たをける事の支度違て止にけり然れば
毒茸を食へとも露不酔ぬ人の有ける也けり此の事の其の山に有ける
僧の語りけるを聞傳マて此く語り傳へたるとや

比叡山横河僧醉茸誦經語第十九

今昔比叡の山の横川に住ける僧有けり秋比房の法師山に行て木伐け
るに平茸の有けるを取て持來たりけり僧共此れを見て此は平茸に
ハ非をなと云つ人も有けれども多人有て此れハ正しれ平茸也と云け

れハ汁物にして栢の油の有けるを入れて房主吉く食てけり其の後
暫許有て頭を立て病む物と突迷ふ事无限と術无くて法服を取出て横
川の中堂に誦經に行ぬ而に□□と云ふ僧を以て導師をして申し上さ
と導師祈り持行て畢し教化と云く一乗の峯にハ住給へとも六根五内
の□□の位を習ひ不給さりけれハ古キコの所に耳を用る間身の病と成り
給ふ也けり鷺の山シテハハに坐たまさんシテハハをりを尋ねつゝも登り給ひなま
不知ぬ茸を思すへらに獨り迷ひ給ふ也けり廻向大菩提と云ければ次
第取る僧共腹筋を切てを咲ひ喰ける僧ハ死許迷て落居けりとなむ語
を傳へたるとや

池尾禪珍内供鼻語第二十

今昔池の尾と云ふ所に禪珍内供と云ふ僧住き身淨くて真言など吉く

習て懃に行法を修して有ければ池の尾の堂塔僧房など露荒たる所無く常燈佛聖なども不施すして折簡の僧供寺の講説など滋く行はせければ寺の内は僧坊隙なく住賑はひけり湯屋の寺の僧共湯不涌さぬ日无くして浴嗶ければ賑はしく見ゆ此く榮ゆる寺なれば其の邊に住む小家共員數出來て郷も賑はひけり然て此の内供は鼻の長ゆりける五六寸許也ければ額よりも下てなむ見えける色は赤く紫色にして大柑子の皮様にしてつふ立てを敷たりける其れ極く痒かをしける事无限然れは提に湯を熱く漏して折敷を其の鼻通る許に置て火の氣に面の熱く炮らるれば其の折敷の穴に鼻を指して通して其の提に指入れてを茹吉く茹て引出ぬれば色の紫色に成たるを喬様にして鼻の下に物どかひて人を以て踏すれば黒くつふ立たる穴毎に

煙れ様なる物出は其れを責て踏めは白き小虫の穴毎に指出たるを子子を以て抜けは四分許の白き虫を穴毎よりを拔出ける其の跡は穴にて開てなむ見えける其れを灸同一湯に指入れてさらめき湯に初如く茹れば鼻糸小さく萎み暖て例の人の小鼻に成ぬ灸二三日に成ぬれば痒くて敷延て本の如くに腫て大に成ぬ如此くにして腫たる日員の多くを有ける然れば物食ひ粥など食ふ時には弟子の法師を以て平なる板の一寸許なり廣一寸許なるを鼻の下に指入れて向ひ居て上様に指上させて物食畢まで居て食ひ畢つれば打下して去ぬ其れに異人を以て持上きする時は悪く指上ければ六借くて物も不食成ぬ然れば此の法師をなむ定めて指上させける其れに其の法師心地悪くして不出來時に内供朝粥食ける鼻持上る人の无ゆりければ

何りせむと爲るなど續ふ程に童の有ける己の吉く持上奉てむ
わい更よよも其の小僧院に不劣いと云けるを異弟子の法子の聞て此の
童の然々なむ申すと云けれ此童中童子の見目も穢氣無くて上にも
召上て仕ける者よて然の其の童召せ然云の此れ持上させむと云け
れの童召將來ぬ童持上の木を取て直しく向ひて吉き程に高く持上て
粥を飲すれの内供此の童の極き上手よこそ有けれ例の法師に増た
をけりと云て粥を飲る程に童顔を喬様に向て鼻を高く簸る其の時よ
童の手篩て鼻持上の木動ぬれの鼻を粥の鏡にふたと打入つれの粥を
内供の顔にも童の顔にも多く懸ぬ内供大きに噴て紙を取て頭面に懸
たる粥を巾つよ己の極かりける心无一の乞食かな我に非ぬ止事无き
人の御鼻をも持上むに此やせむと爲る不覺の白者かな立ね己と云

追立ければ童立て隠れに行て世に人の此る鼻つき有る人の御はこそ
は外にては鼻も持上め嗚呼の事被仰る御房かなと云ければ弟子共
此れを聞て外に逃去てを咲ける此れを思ふに實は何のなりける鼻に
り有けむ糸奇異のりける鼻也童の糸可咲く云たる事を聞く人讚け
るとなむ語り傳へたるとや

左京大夫□□符異名語第廿一

今昔村上天皇の御代に舊宮フシキミヤの御子にて左京の大夫□□と云人有けり
長少ホシタカ細高にて極くあてやかなる様はしたれとも有様姿なむ嗚呼也
ける頭の鏡頭也ければ纓は背に不付すして離れてなむ被振ける色は
露草の華を塗たる様に青白にて眼皮は黒くて鼻鮮に高くて色少し赤
りりけり唇の薄く色も无くて咲の齒りかなる者の斷ツグは赤なむ見えけ

る音の鼻音にて高四りけり物云へ一内響てを聞はける歩ひの背を
振り尻を振てを歩ひける其の人殿上人にて有けるに責て色の青四り
けれの□□の殿上人皆此れを青經の君とを付けるを喚ひける就中に
若き殿上人共の勇み寵たるの此の青經の君を起居に付けて不安を極
く喚ひけれの天皇此れを聞食し餘りて殿上の男共の此れを此く喚ふ
糸便无き事也父の御子此れを聞は此く制止するとの不知すして我
をこそ被恨むとすれと仰せ給ひてまめや四に六借らせ給ひけれの殿
上人共皆舌哭シメトキをして此れより後の不喚ましき由を云契てけり然て起
請しける様は此く六借らせ給へは今より後永く此の青經と呼ふ事を
停止ぬ若し此く起請て後青經と呼たらむ人よの酒肴菓子など取出
させて贖せむと□契てけり其れ後幾程も无くて堀川の兼通の大臣の

中將にて御ましけるか此の起請を急を忘にけれの□危无く此の人の立
て行く後を見て彼の青經丸の何ち行くをと宣けるを殿上人共此れを
聞て此く起請を壞つる事の糸便无き事也然れの云定めし様に速にや
めて酒肴菓子取に遣て其の事可贖と集て責喚けれの堀川の中將戲
れて不爲と辭ひ給けれとも集てまめやかに責けれの中將然らは明
後日許此の青經呼ひたる事は贖む其の日殿上人藏人有る限り集り
給へと云て里へ出給ひにけり其の日に成て堀川の中將青經の君呼た
る過可贖とて殿上人皆不參ぬ人无く皆参たり殿上に居並て待つ程
に堀川の中將欄すか姿にて形の光る様なる人の愛敬の泛よに泛て艶す馥く
て参り給へり欄のなよゝかに微妙さ裾より青き出裾をいたり指貫も
青き色の指貫を着たり隨身四人に皆青き狩衣袴袖を着せたり一人に

の青く綵たる折敷に青瓷の盤一箔を口て盛て居たるを持せたり一人
よは青瓷の瓶に酒を入れて青き薄様を以て口を裹て持せたり一人に
は青き竹の枝に青き小鳥五つ六つ許を付て持せたり此等を殿上の口
より持次きて殿上の前に参たれば殿上の人共此を見て皆諸音に咲嗶
る事愕たし其の時天皇此を聞食して此は何事を咲と問はせ給
ければ女房兼通り青經呼て候へは其事に依て殿上の男共に被責て其
罪贖ひ候ふを咲ひ嗶を候ふ也と申しければ天皇何様にして贖ふと
て日の御座に出させ給て小部より臨せ給けるよ兼通の中將我り身よ
り始て隨身も皆ひた青なる装束をして青き食物の限を持せて参たれ
は此れを咲ふ也けりと御覽して可咲く思食ければ否腹立せ不給て天
皇も極く咲はせ給ける其の後いませや四に六借らせ給ふ事も无り

けれの殿上人共彌よなむ咲ひ嗶ける然れば青經の君に異名付て止よ
けりとなむ語り傳へたるとや

忠輔中納言付異名語第廿二

今昔中納言藤原の忠輔と云ふ人有けり此れ人常に仰て空を見る様に
てのみ有ければ世の人之れを仰き中納言とそ付たりける而も其の人
れ右中辨にて殿上人にて有ける時に小一條の左大將濟時と云ける人
内に参を給へりけるに此の右中辨に會ぬ大將右中辨の仰きたると見
て戯れて只今天にも何事か侍ると被云ければ右中辨此く被云く少攀
縁發ければ只今天に大將を犯す星なむ現したると答へければ大將
頗る半无く被思けれども戯なれい否不腹立すして苦咲て止にけり其
の後大將幾く程を不經すして失給ひけり然れば此の戯言の爲るにや

とそ右中辨思ひ合せける人の命を失ふ事は皆前世の報とい云乍ら由
無からむ戲言不可云す此く思ひ合する事も有れば也右中辨は其の後
久しく有て中納言まで成て有ければも尙其れ異名不失すして世の
人仰中納言とそ付て咲けるとなむ語り傳へたるとや

三條中納言食水飯語第廿三

今昔三條の中納言と云ける人有けり名をは□□とそ云ける三條の右
大臣と申ける人の御子也身の才賢ありければ唐の事も此の朝の事も
皆吉く知て思量り有り肝太くして押柄になむ有ける夕筵を吹く事な
む極たる上手也ける夕身の徳なとも有ければ家の内も豊ありけり
長高くして太りに太りてなむ有ければ太りの賣て苦しまて肥あり
ければ醫師和氣の重秀を呼て此く太るをい何かせむと爲る起居あと

爲る四身の重くて極く苦き也と宣ければ□□申ける様冬は湯漬夏
は水漬よて御飯を可食さ也と其の時六月許の事なれば中納言□□を
然り暫く居たれ水飯食て見せむと宣ければ□□宜ふに隨て候けるに
中納言侍を召せり侍一人出來たり中納言例食ふ様にして水飯持來
と宜へは侍立ぬ暫許有て御臺行□□を持參て御前より居るつ臺は箸
の臺許と居えたり次れて侍盤を捧て持來る□□の侍臺に居うるを見
れり中の甕は白き干瓜の二寸許なる不切すして十許盛たり夕中の
甕に脂鮎の大きに廣らなるを尾頭許を押して卅許盛たり大きなる鏡
を具したり皆臺に取り居るつ夕一人大きな銀の提に大なる銀
の匙を立て重氣に持て前に居たり然れば中納言鏡を取て侍に給て此
れに盛れと宜へは侍匙に飯を救つゝ高やの盛上て喬に水を少

入れて奉たれば中納言臺を引よせて鏡を持上給たるは然許大きな手に取納ヘルマに大きな鏡ハタなど見ゆるは氣クうは非ぬ程なるへし先つ干瓜と三切許に食切て二つ許食つ次に鯖鮎を二切許に食切て五ツ六ツ許安らひ食つ次に水飯を引寄せて二度許□箸廻し給ふと見る程は飯失ぬれは盛れとて鏡を指遣り給ふ其の時に□□水飯を役と食とも此の定にたに食さは更に御太り可止まるへきは非すと云て逃て去て後に人よ語てなむ咲ける然れば此の中納言彌よ太りて相撲人の様にてそ有けるとなむ語り傳へたるとや

穀斷聖人持米被咲語第廿四

今昔文徳天皇の御代は波太岐の山と云ふ所に聖人有けり穀を斷て年來と經にけり天皇此の由を聞食て召出して神泉に被居て皈依せさ

せ給ふ事无限と此の聖人永く穀を斷たる者なれば木の葉を以て食としてなむ有ける而る間若く勇たる殿上人の物咲する數去來行て彼の穀斷の聖人見むと云て彼の聖人の居たる所に行ぬ聖人の極く貴氣にて居たるを見て殿上人共禮拜して問て云聖人穀を斷て何年せに成せ給ひぬと年は何の成給ふと聖人の云年既に七十に罷成たるに若より穀を斷たれば五十餘年に罷り成ぬと云ふ聞て一人の殿上人忍て云く穀斷のしたる屎は何様に有らむ例の人乃には不似しか去來行て見むと云合せて二三人許厠に行て見れば米れを多く□量たり此れを見て穀斷は争て此くは可爲きと怪ひ疑ひて聖人の居所に返り行たれば聖人白地に立去たる間に居たる疊を引返して見れば板敷に穴有り下は土を少し掘たり怪しと居て吉く見れば布の袋は白き

米を裏て置たり殿上人共此を見て然れのよと思て疊を本の如くに敷て居るよ聖人返ぬ其の時に殿上人共頰咲て米屎の聖々と呼嗚て咲けれの聖人恥て逃て去けり其の後行き方を人不知すして止にけり早う人の謀を被貴むとて密に米を隠して持をけるを不知して穀斷と知て天皇も皈依せさせ給ひ人も貴ひける也けりとなむ語り傳へたる也

彈正彌源顯定出閣被咲語第廿五

今昔藤原の範國と云ふ人有けり五位の藏人よて有ける時小野の宮の實資の右の大臣と申す人陣の御座よ着て上卿として事定め給ひけるよ彼の範國の五位の職事にて申文を給ひらむわ爲よ陣の御座に向て上卿の仰せを奉る間彈正彌源の顯定と云ふ人殿上人よて有ける

南殿の東の妻にして閣を掻出ぬ上卿の奥の方に御すれの否不見給す範國は陣の御座の南の上よて此れを見て可咲きよ不堪すして咲ぬ上卿範國の咲を見て案内を不知給うして何わて汝は公の宣を仰せ下す時に此く咲そと大きに被咎て即ち此の由を奏し給ひければ範國事苦く成て恐ち怖けり然れとも範國此く顯定の朝臣の閣を出したりつればと否不云出てを止にける顯定の朝臣は極て可咲を思ける然れの人折節不知ぬ由无き戯れは不爲まじき事也となむ語り傳へたる也

安房守文室清忠落冠被咲語第廿六

今昔安房守文室の清忠と云ふ者有き外記の勞にて安房守に成たる也其れの外記にて有し間九面わたり顔よて氣慥氣にて去張てなむ

有し久出羽の守大江の時棟と云ふ者有き其れも同時に外記也し時腰
屈て嗚呼付てなむ有る而る間除目の時に陣の定め陣の御座に被召
て清忠時棟並て箱文と給はる間時棟笏を以て手を廻して指すは清忠
り冠に當て打落しつ上達部此れを見て咲ひ嗚り給ふ事无限し其の
時に清忠迷て土よ落たる冠を取て指入れて箱文も不給はらすして
逃て去にけり時棟は奇畏氣なる顔をして立りける其の比の世の咲
ひ物には此事をなむしける思ふに實に何かに奇異ありけむ清忠も
時棟も遙に年老るまでなむ有し此なむ語り傳へたると也

伊豆守小野五友目代語第廿七

今昔小野の五友と云ふ者有けり外記の巡にて伊豆守に成たりけり其
れは伊豆の守よて國に有ける間目代の無かりけり東西に目代よ可

仕き者や有ると求させけるに人有て云く駿河の國になむ才賢く弁へ
有て手など吉く書く者は有と告げれり守此れを聞て糸吉き事をよそ
と云て態と使を遣て迎へ將來たりけり守見れば年六十許れ男の大き
に太りて宿徳氣也打咲たる氣も無くて氣慥氣なる顔したれば守此れ
を見るに先つ心は不知す見目は吉き目代形なめり人物云ひ慥氣なる
氣色したりと思て手何の書くとして書せて見れり手の書様微妙く
无けれども筆輕くて目代手の程よて有り弁への何の有らむと思て搦
亂れたる事の沙汰文を取て此の物何ら入ると沙汰せよと云へは
此の男文を取て引披て打見て算取出して糸轆く打置て程も无く何ら
なむ候けると云へは守心の不知す先つ弁へは極き者也けりと喜ひ思
て其の後國の目代として萬の事を知せて引付て仕けるに二三年許に

成ぬれとも露守の氣色に違ぬる心はへ不見ゑす只萬の事を直く定め
て居たりけり人の遅く沙汰せし事共をも即ち疾く沙汰して常に暇を
有せてなむ有ける此く萬に賢ければ守便をも付ゆしと思て國の内に
可然き所共を數知せけれども指せる徳付たりとも不見す然れば館の
人にも國の人にも極く被受て重き者に被用てなむ有ける然れと隣
國まで賢き者をなむ聞ひたりける而る間此の目代守の前に居て文書
共多く取散して夕下文共を書せ其れは印指する程に傀儡子の者共多
く館に來て守の前は並居て歌を詠ひ笛を吹き謔く遊ふは守も此れを
聞くに我の心地にも極くすゝろはしく謔く思ひけるに此の目代の印
を指すを見れば前には糸吉く指つる者の此の傀儡子共の吹き詠ふ拍
子に隨て三度拍子に印を指ぬ守此れを見るに惟ごと思て護る程に目

代數宿徳氣なる肩者々と夕三度拍子に指す傀儡子共其の氣色を見て詠ひ
吹き叩き増て急に詠ひ早す其の時に此の目代太く辛ひたる音を打出
して傀儡子の歌に加へて詠ふ守奇異く此を何にと思ふ程に目代印を
指々す昔の事の難忘りと云て俄に立走て乙けれの傀儡子共彌よ詠ひ
早しけり館の者共此れを見て興へ咲て喰ける程に目代耻て印を投棄
て立走て逃ぬれと守此の事を怪かりて傀儡子共に此は何なる事と
問ければ傀儡子共の云く此の人は古へ若く侍りし時傀儡子をなむ仕
を候ひし其れの手などを書き文を讀て今は傀儡子とも不仕て此の様
に罷成て此の國の御目代にてなむ候ふと承はりて若し昔の心はへ不
失すもや候ふと思給て實には御前に罷出ては早し候ひつる也と云け
れば守實に印を指し肩を指つる氣色然に見つる事となむ答へける館

の者共は此の目代の立走て乙けるを見ては傀儡子共の此く吹き詠ひ遊ゆ謔さに不堪して立て乙るなるへし然れば然様の物興し可爲き氣色も無かりつる人のなと思ひ云ける程に傀儡子共の此く云ふを聞てなむ然は此の人は本傀儡子にて有けりとは知ける其の後は館の人も國の人も傀儡子目代となむ付て咲ける少し思ひ下にけれとも守系惜かりて尙仕ひけり然れば一國は目代に成て思ひ忘たる事なれとも尙其れ心不失して然か有けむ其れは傀儡神と云ふ物の狂か乙けるなめりこそ人云けるとなむ語り傳へたるを

尼共入山食葺舞語第廿八

今昔京よ有ける木伐人共數北山に行たりけるよ道を踏違て何方へ可
行しをも不思ひさりければ四五人許山の中よ居て歎ける程に山奥の

方より人數來ければ怪く何者の來るにや有らむと思ける程よ尼君共の四五人許極く舞ひ乙て出來たりければ木伐人共此れを見て恐ら怖れて此の尼共の此の舞ひ乙て來るは定めてよも人には非し天狗にや有らむと鬼神にや有らむとを思て見居たるに此の舞ふ尼共此の木伐人共を見付て只寄に寄來れば木伐人共極く怖しとは思ひ乍ら尼共の寄來たるに此は何なる尼君達の此くは舞ひ乙て深き山の奥よりは出給たるを問ひければ尼共の云く已等か此く舞ひ乙て來ては其達定めて恐れ思らむ但し我等も其々に有る尼共也花を摘て佛に奉らむと思て朋なひて入たりつるり道を踏み違へて可出き様も不思て有つる程に昔の有つるを見付て物の欲きまゝに此れを取て食たらむ醉やせむすらむとは思ひ乍ら餓て死なむよりの去來此れ取て食むと

思て其を取て焼て食つるに極く甘のりつれは賢き事也と思て食つるより只此く不心を被舞る也心にも糸怪しき事などは思へとも糸怪くなむと云に木伐人共此れを聞て奇異く思ふ事无限然て木□人共も極く物の欲のりければ尼共食殘して取て多く持ける其の昔を死なむよりは去來此の昔乞て食むと思て乞て食ける後より又木伐人共も不心す被舞けり然れば尼共も木伐人共も互に舞つゝけて咲ける然て暫く有ければ醉の悟たる如くして道も不思て各返にけり其れより後此の昔をの舞昔と云ふ也けり此れを思ふに極て怪き事也近來も其の舞昔有れとも此れを食ふ人必ず不舞す此れ極て不審き事也となむ語り傳へたることや

中納言紀長谷雄家顯狗語第廿九

今昔中納言紀の長谷雄と云ふ博士有けり才賢く悟廣くして世に並ひ無く止事无き者にての有けれども陰陽の方をなむ何にも不知さりけり而る間狗の常に出來て築垣を越つゝ尿をうければ此れを怪と思て□□の□□と云ふ陰陽師に此の事の吉凶を問たりければ其の月の某の日家の内に鬼現する事有らむとす但し人を犯し祟を可成き者には非すと占たりければ其の日物忌を可爲さなりと云て止ぬ而る間其の物忌の日に成て其の事忘れて物忌をも不爲さりけり然て學生共と集めて作文して居たりけるに文頌する盛に傍に物共取置たりける塗籠の有ける内の方に極て怖し氣なる者の音にて吠ければ居並たる學生共此の音を聞て此れは何の音を□りと云つゝ恐ち迷ける程に其の塗籠の戸を少し引開たりけるより動出る者有るを見れば長二尺許有

る者の身は白くて類は黒く角の一ツ生て黒く足四ツ有て白く此れを
見て皆人恐迷ふ事無限し而るに其の中一人の人思量有り心強かを
ける者にて立走るまゝに此の鬼の頭の方をはたと蹴たりければ頭
の方の黒き物を蹴抜きつ其の時に見れぬ白く狗の行と哭て立てり早
う狗の椽と頭に指入たりけるを椽と蹴抜きたるまゝに見れぬ狗の夜
る塗籠に入にける椽と頭を指入てけるを否不引出て鳴く音の怪し
き也けり其れり走り出たるを物恐と不爲す量り有ける者の狗の然り
有ける也けりと見て蹴顯したる也けり此く見て後になむ人共肝落居
心直りける其の後集て咲けり然れぬ實の鬼は非ねとも現し人の目
に鬼と見ゆれぬ鬼とは占ける也其れに人を犯し祟を可成き者に非
すと占ひたる實は微妙き事也と云てそ人々皆占を讚め嗶りける但し

中納言の然許才有る博士よての物忌の日を忘る最と云ふ甲斐无う弊
き事也とを聞く人誘ける其の比は此の事をなむ世に云ひ繚ひ咲ける
とあむ語り傳へたる也

左京屬紀茂經鯛荒卷進大夫語第三十

今昔左京乃大夫□□の□□と云ふ舊若達有けり年老て極く舊め如し
ければ殊に行きも不爲て下邊なる家になむ籠り居たりける而るに其
の職の屬にて紀の茂經と云ふ者有ける長岳になむ住ける其の職の屬
なれば彼の大夫の許に時々行てなむ揺けるユコウ而る間茂經宇治殿の盛に
御まじける時に參て贄殿に居たる程に淡路の守源の頼親朝臣の許よ
り鯛の荒卷を多く奉たりけるを贄殿に多く取置けるに贄殿の預□
□の義澄と云ふ者も茂經其の荒卷を三卷乞取て我り職の大夫の君に

此れ奉て握り申さむと云て此の荒卷三卷と間木マキを捧置て義澄に云此の荒卷三卷人を以て取をに奉らむ時に遣はせと云置て茂經は殿を出て左京の大夫の許に行て見れば大夫は出居て客人二三人許來たを大
夫其の主せむとて九月の下旬許の程の事なれば地火爐オコシ火ヒ□□ナシなどして物食ひむと爲るに墓々ムムき魚もなし鯉鳥なども用有氣也其れに茂經指出て申す様茂經の許にこそ攝津の國は候ふ下人の鯛の荒卷四五卷許今朝持來りて候つるを一二卷は宿の童部と共食へ試み候つるに艶す微妙く鮮ニ候ひつれば今三卷の穢ニ候はすして置き候つるを念ニ罷シを出て候つるに下人の不候して否持参り不候さりつるに只今取シ遣さむ何れと音と捧てシたり顔に云張りて口脇と下け袖疏をして延上て申せり左京の大夫可然き物の只今无シりつるに糸

吉き事かな疾く取に遣れと云ふ客人共も只今可然き物の不候さりつるに近來の美物の鮮なる鯛をかし鳥の味ひ糸弊ニ鯉は未だ不出來す然れば生き鯛の極き物なシりと云合り然れば茂經馬引リへたる童を呼ひて取て其の馬をと御門ニ繋て只今走て殿の費殿に行て費殿の預の主に其の置つる荒卷三卷只今遣せ給へと云て取て來と私語きて走れ走れと手搔て遣つ然て返り参て俎洗て持詣來と音高に云てやハる今日包丁茂經仕らむと云て魚箸削り鞘なる包丁を取出して打鏡て遅シ々シと云居たる程と遣つる童は糸疾く木の枝ニ荒卷三卷を結付て捧て走て持來たり茂經此れを見て哀飛ニ如くに詣來たる童ハなど云て俎の上の荒卷を置て事しも大鯉ニを作らむ様に左右の袖を引疏て片膝ニ立て今片膝をハ臥て極て月々しく居テ少喬みて刀

を以て荒卷の繩をふつくと押切て刀にて藁を押披たるに物共泛れ
落つ見れば平足駄の破たる舊尻切の壞たる舊藁沓の切たる此様共ほ
ろくと泛れ出つ茂經此れを見まゝにて魚箸も刀も打棄て立走て沓
も不履敢す逃ぬ左京の大夫も客人共も奇異く目口開て居たり前なる
侍共も□□て此も彼も云ふ事無し物食ひ酒呑つる遊共興も無く成て
皆冷しく成ぬれば獨立に立て皆去ぬ左京の大夫の云く此の尊の本よ
り此く艶ぬ物狂とは知たれとも官の上と思て常より來睦ひつれば吉と
の不思ねとも可追き事には非ねは只來れば來ると見て有つる也其
れに此る態をし出して量らは何にかの可爲き物惡き身の墓无き事に
觸れても此く有る也何に世に人聞繼で世の中の咲種にし末の世まで
物語にせむと云ひ次て空を仰て老の浪に極き態かなと歎くこと无

限一此の茂經は出走て馬に乗馳散して殿に參て贊殿預り義澄に會て
云く彼の荒卷を惜と思給ひし穩し得させ不給ひては非て此る態をし
給ふは糸と情け无き事也と哭ぬ許恨み嗚る事无限し義澄の云く此は
何より宣ふ事を義澄の荒卷を其に奉て後要事有て白地に宿りの罷り出
つとて義澄の從者の男に申し置つる様左京の屬主の許より此の荒卷
取に被遣たらひ取て慥に其の使に取らせよと云置て罷出て只今返
り參たる也と事の有様をも不知して云へは茂經然ら其の主の云預け
給つらむ男の四度解无しこそ有けれ其れを呼て問給へと云へは義澄
其れ男を呼て問て尋ぬる程に膳夫の有るに此れを聞て云ふ様其の
事は已こそ聞侍つれ已か壺屋に入居て聞居て侍つれば此の殿の若
き侍の主達の勇み寵たる數費殿に御して間木に被捧たる荒卷を見て

此の何その荒卷を被問つれの誰り申つるに如有らむ此れの左京の
 屬主の御荒卷を被置たる也と答つれば主達然ての可爲き様有と云て
 荒卷を取下して鯛をは皆取出して切食て其の替は破たる平足駄の
 片足や舊尻切の壞たるや舊藁沓の切たるなどをこそ求めて籠めて
 被置ると聞待つれと語れば茂經此れを聞て嘆を噓る事无限と其の嘆
 音と聞て此したる者共來つゝ嘆ひ噓る事无限然れ義澄は己れは
 更に不誤ぬ事也となむ云ける然て茂經は云甲斐无くて返にけり其の
 後思ひ侘て人の此く嘆ひ噓る程の不行しと思て長岳の家になむ籠居
 たりける此の事鬚に世に聞ゆければ其の比の物語に此の事をむ語
 て人笑ける茂經其の後耻て左京の大夫の許へ否不行す成にけり現に
 否不向し如しとなむ語り傳へたるとや

明治十五年八月四日出版御届

定價金三拾錢

出版人

東京府平民
 近藤圭造
 深川區富岡門
 前町七十番地

發兌出版所

東京深川公園内
 近藤活版所

東京發兌

丸屋善七
 吉川半七

取次人

芝區濱松町壹丁目十五番地
 志賀二郎

